

釧路湿原自然再生協議会 再生普及小委員会
第12回湿原学習のための学校支援ワーキンググループ議事録

日時：令和3年2月5日（金）16:00～17:30

※オンラインにて実施

【出席者（敬称略・順不同）】

<専門家>

- ・高橋 忠一（再生普及小委員会委員長）
- ・境 智洋（北海道教育大学釧路校 教授）

<学校教員>

- ・釧路町立別保小学校 カネフラー 明奈
- ・鶴居村立下幌呂小学校 柴田 康吉
- ・鶴居村立幌呂中学校 長谷 泰昌
- ・釧路湖陵高等学校 池田 耕

<学校教育行政機関等>

- ・北海道教育庁釧路教育局 義務教育指導班 指導主事 佐々木 慶典
- ・環境省北海道地方環境事務所 釧路自然環境事務所 自然再生企画官 瀬川 涼

<ワーキンググループ事務局>

- ・環境省北海道地方環境事務所 釧路自然環境事務所 自然保護官 瀧口 さやか
- ・公益財団法人北海道環境財団 山本 泰志、安田 智子

事務局(瀧口自然保護官) 第12回湿原学習のための学校支援ワーキンググループ(以下WG)を開催する。(配布資料の確認、オンライン会議開催にあたっての補足事項説明後、出席委員より自己紹介)
以降の進行を高橋座長にお願いする。(以降、高橋座長により進行)

議事1 ワーキンググループの取組み報告

事務局(瀧口自然保護官) 資料1「1. 湿原を題材とした学習素材の収集、活用の促進」について資料に基づき説明後、映像資料について画面共有を行い補足して説明。

ここで一度区切らせていただき、ご意見等をいただきたい。

高橋座長 補足の説明やご意見をいただきたい。

事務局(山本) 別保小学校の中間発表会にもご参加いただいた、境委員にご感想等をいただきたい。

境委員 ヤチボウズやヤチマナコの写真が動画で見れることは良いと思うが、本来はヤチボウズの前で実際に開いてみた時の感動の方が良いだろう。そういった環境がない時のための資料であって欲しい。ヤチマナコは深いということがわかる画像は必要であろうが、子どもたちが調べたいものというのは、ヤチマナコの中がどうなっているのかということが一番の探求課題。底がどのようになっているのか、底にどのような生き物がいるのか、底の様子は草が生えているのか、石があるのか。児童によっては、底がないのではないかと予想している子もいる。どのくらい深いのか分からない。そうした事にはまだ答えられていない。今後、水中ドローンなどで撮影した映像や、中がどのようになっているのかわかるものが出来ると良い。実際に子どもたち自身が確かめられるようなことが本来は出来ればよい。

柴田委員 実際に行くことが出来れば一番良いと思うが、資料としてある程度まとまってきたということは、学校の現実的な予算や時間の中で折り合いをつけていく中では一つの手立てとなる。現在は、困った時はインターネットで調べるという流れになってしまうことが多い。実際に行くことが最も良いが、様々な方法から子どもたちが手段を選んで出来るということはとても良いと思う。子どもたちは中がどうなっているのかを知りたい。水中眼鏡をつけて潜れと言いたいところではあるが、現実的には難しい。では、どうやって中を見るのかと考えた時、防水カメラや箱眼鏡ではどうかと意見交換していくことも学習の一つ。そうした過程も大切にして出来ればなお良いと感じる。

高橋座長 前回の会議で、境委員よりインターネットを用いて単なる調べ学習で終わってしまうことに危惧しているというご意見があった。調べ学習に手慣れてきた子どもたちにとっては、手っ取り早く、わかりやすく、そこそこに物事が仕上がると思うが、実際に手に触れるといった体験的な学習が考えられないかということが印象としてある。生徒たちの知的好奇心というものが我々の想像を超えていることがあり、指導する立場の先生にとって、それに驚かされるということが起こるのではないかと思う。そういった”引き出す”ということが大切なきっかけであるように思う。時間やお金などの問題もある中で、上手にそれらの条件を満たしながら行っていく手立てはないだろうか。

境委員 探求させるということは、子どもたちから様々な疑問が出て来て、その疑問に対して自分たちが調べていくというプロセスの繰り返しになっていく。今の子どもたちは疑問を出した

ことに対してすぐに解答を求めてしまう。インターネットで調べてすぐに書いてしまう。それを良しとするのではなく、例えば、書いてあることを疑ってみる。他のページでも調べてみる。それが例えば、4つ、5つと同じことが書いてあれば良しとするといったように、一発で解答を出すということだけは避けてあげたいと思う。様々なところから、様々な情報を持ってきた時に初めて、そうなんだと言えるとといった過程を追えると良い。実際に調べることが出来ない場合は多々あるが、インターネットで調べて書いてあることをそのまま書いてしまうのではなく、例えば、書いてあることをまとめさせた後、博物館などに行き、私たちはこのように調べ、このように書いてあったが、どうなのかと学芸員等に聞いてみる。そうだとと言われて初めて、そのことを書く。一つのことに対してすぐに解答を求めるのではなく、それが本当のことかを検証していく過程が今後大切になってくると自身は思っている。これだけ情報が溢れている中で、最後の最後に結論を出すまでのプロセスが大切になってくる。

高橋座長 この問題は重要なことだと感じており、すぐに答えを求める姿勢というものは、徐々に育てられて出来上がってしまったものだと思う。一度疑ってかかるということが重要で、学習の中で、個人的な研究の中で、高校ではどのように指導されているのか。

池田委員 調べ学習や探求にしても、現在のこうした状況もあるので、インターネットで調べることが多々ある。手っ取り早く記載されている Wikipedia 等のサイトは引用するようになり、しっかりと根拠にはならないということを繰り返し伝えている。逆に、生徒から出された疑問に対して Wikipedia にそのように書いてあると伝えると、それは信用してはいけないのではないかと生徒から指摘が入ることもあり、複数の情報源から検証しなくてはならないということを確認する。複数の情報源から検証する、情報を疑うということは、様々な教科、科目でも言われてきており、湖陵高校の場合では、基盤として定着してきてはいる。

高橋座長 実際に触れること、体験が大切ということは昔から言われてきているが、その本当の意味合いを捉え直すと、様々な問題が出てくると感じるが、それが良い方に進んでいけばと思う。様々なご意見があると思うが、次の資料説明に進みたい。

事務局（瀧口保護官） 資料1「2. 自然再生の学校教育への活用促進」、「3. 学校教員の関心喚起、湿原の教育的な価値の普及」について資料に基づき説明。報告内容について取組み風景を画面共有して補足説明後、標茶小学校5年生の担任教諭から事前にいただいた意見を動画で共有。

標茶小学校 蛭名教諭、福岡教諭（事前収録）

《研究発表ボードの活用について》

ボードを活用することで、自分の考えが一枚のものになる。理科などの他の学習においても、課題を持ち、見通しを立て、実験など解決方法を見つけ、実際に取り組んで、自分の考えをまとめて振り返るといったことを行っており、こうした流れが一枚になっているので、どの授業でも使え、とても良いと感じる。

《釧路湿原を学習の題材とすることについて》

標茶町という町は湿原が非常に多い町なので、自分たちの故郷は湿原が多い町ということを感じることができ、改めて自分の町、素敵な町なんだ、環境に恵まれた町なんだということを確認する意味では大変良かったと思う。自分たちの町には素晴らしいものが沢山あるということをしつかりと学習していくと、他者にも伝えていけるとということもあり、とても良い学習

だと感じた。

《外部講師による評価について》

実験はしたとしても、考察につながっていない、上手くまとめられていないということが見抜かれていたのだと思う。考察にどう結び付けるかが大切だという指導を常にしてきたが、考察はどのように書けばよいのか質問してくれた事に関しては、しっかり書けていたのではないかと思う。選ばれたボードを聞いて、そうだよねといった声もあり、選ばれたボードはわかりやすさはあったのだと思う。私で良いのかと言う児童もいたが、こういう部分を見てくれていて、そうした部分が素晴らしかったのではないかということ伝えた。似た内容に取り組んでいた児童も自分たちの代表が選ばれたという感覚を持っていたようだ。

《課題》

もう少し深い課題を持てるように教員側がどのように手立てを持てば良かったのか。深まった追及をさせたかったが、その部分は自分たちの課題と感じる。違う実験に変わっていても良いという話をし、結果を踏まえてまた実験するというのも楽しいことだと指導していくと、子どもたちも、この結果だったから次はこうなのではないかと予想を立てられる子もいた。そうした子には、どんどんやりなさいと後押しをしていた。探求心が強い子たちが今年は多かった。実験してなんぼだよと伝えると、皆が実験をしていた。

《インターネットの情報について》

インターネットの情報なんてという話を子どもたちには伝えた。インターネットの情報だけに頼っては何にもならないし、インターネットの情報がわかるのかと子どもたちに聞くと、わからないと言う。わからないことを書き写して発表するというのではなく、自分たちが興味を持ったことを少しでも実験した方がわかるでしょと伝えていた。そのほうが、面白さもあり、自分たちで調べるという方にシフトしていったのだろうという印象がある。

《ノウハウの継承》

前年度の先生に、どのようなことをやっていたのか、子どもたちはどのような事に興味を持っていたのかということを知りたい。前年に行われた子どもたちの発表の様子をカメラで記録もしているので、子どもたちも見直しは持てたのだろうと感じる。興味の持ち方は子どもたちそれぞれにはなる。このようなものを作っていたということを伝えながら、昨年の子どもたちが取り組んだボードを最初に見せていたが、子どもたちは昨年の子どもたちが立てた課題に流れることなく、各自が関心を持った課題設定をした子が多かった。

高橋座長 参加されている先生の中から意見をいただきたい。

長谷委員 ヤチボウズの動画について、周囲との関係について感じたいと思いながら拝見していた。細かな高低差であったり、地面の柔らかさであったり、こうしたことは歩かないとわからないものだと感じるが、そこもリアルタイムのやり取りで出来るとなると良い。例えば、カメラを下に向けて欲しい、水中に入れて欲しい、高いところから見たい、足元はどうなっているの、ヤチボウズ割ってみてといったように、子どもたちからリクエストを受けて現場で対応する。難しい部分もあるだろうが、リアルタイムで行えると面白いのではないかと感じた。身の回りで代替実験はできないか実験を考えてみたり、ヤチマナコを稲科の草で作ってみよう、作り方はインターネットで調べてみようというように、インターネットを道具にして行えると良いのではないかと感じた。答えがあるというよりも、子どもたちが自分で問いを作り、自分で答え

をつくり出していくという学びの方が現在は大切なのではないかと感じている。慶応義塾大学の井庭崇さんがクリエイティブラーニングというものを行われている。ファシリテーターから学びの促進者へという話をされており、それを見た時に新庄さんを思い出す。楽しんで一緒に活動するということが、子どもたちの好奇心を育てるのだろうと感じた。

湿原が多いという標茶小学校の先生からのお話があったが、故郷を肯定的に捉えるということは個人の自己承認にもつながり、地域の魅力的な働いている大人と関わるということもつながりやすい活動だと感じた。キャリア教育としても、また、地域から一度離れても故郷に帰ってきたいと思える環境を作ること、人の薄く広い関係を作ることが効果的だと言われており、そのような学びを鶴居でもやってみたいと感じた。中学校ではどうしてもカリキュラムマネジメントを行うことが難しいところがあるが、アウトプット部分で各教科と結び付けられないかと思う。英語で発表したり、数学のグラフで発表したり、社会の歴史の説明と絡めたり、音楽やダンスで表現したり。つなげる楽しさということが先ほど出ていたので、それを上手くできないかと感じた。

高橋座長 ご意見を伺い、中学生、高校生と学校は変わっていくが、最終的に、正しく質問できること、正しく疑問を感じられることができるようになっていけば、例えそれが小学生でも、中学生でも、高校生でも、一人の立派な研究者であると感じる。一緒に話し合いができる立場に立つと感じる。そのようになれば、逆に言えば、教える立場の人が教えられたりと同列に立つことができる。実際に手に触れたりといった授業がきっかけになればと感じる。ボードに関しては、境委員の助言があり取組みを始めて何年かが経つ。数年前までは模造紙に絵を書いたりといった発表会の域をなかなか出ることができなかったと感じる。ボードには、はっきりと項目が示され、例えば、なぜその問題について調べたいのか、どんなことが予想できるのか、結果はどうだったのか、それについてどのように考えたのか、新たな問題は起きたのかといった事を、小学生であっても、中学生、高校生であっても、同じような立場でそれが行えるようになってくることを目指しているわけだが、取組みを始めて何年かが経過し変わってきた部分はあるだろうか。

境委員 標茶小学校の発表ボードの作り方、研究の内容はどんどん変わってきている。発表会に行く度に毎年深まっていっていると感じる。例えば、今年はインターネットに書いてあることを否定してみようという子どもが出てきた。キノコが探求の課題であったが、キノコについてインターネットに書いてあるが、それを疑い自分でやってみた。また、教科との関連という部分で、例えば、ヒシの実を調べたいという時に、中に入っているのは栄養なのか。4年生、5年生ではヨウ素を使って中にでんぷんがあるのか実験をするが、それを応用し、中にどのようなものが入っているのか自分なりに調べている。教科で習ったことを使って、そのように実験をしようとする子どもが出てきている。今回、実験が大変多くなったと感じる。自分で考えたことに対して、どうだったかということを実験したり、コンクリートに出てきている植物と普通の土に出てきている植物に違いがあるのか比較して観察したり。小学校のレベルとして、3年生の理科では比較するといったように様々な資質が考えられて学習していくが、5年生までに学習したことを上手く活用して自分なりの発表ボードを作っている姿が出てきた。それはここ数年で本当に変わってきたと感じる。別保小学校も見てきた中で、子どもなりの仮説を立てて取り組んでいる姿は大変良かったと感じる。やはり課題を見つける部分はすごく難しいが、その

部分を先生と一緒に調べてよという姿勢を持っているのがすごく良いと感じる。標茶小学校の先生たちも一緒に調べている。教えてあげようと思った時に、おそらく学校の先生は破綻してしまうだろう。しかし、一緒に調べてよという姿勢が楽しいことにつながっていく。さらに、子どもに対して疑問を持たせる。子どもたちが、ある課題を出した時に、それはどうなのか、例えば、これを調べたいと言う子に、どうしてと問う。こうやりなさいではなく、常に疑問で返してあげる。その中で子どもたちがどんどん調べていって、子どもたちが自分の課題にしていく姿が見られた。この5年間で本当に変わってきた。この子たちが探求の過程をきちんと学んでいけば、高校に行った時に、きっと自分たちで探求課題を見つけ、探求理科などの部分でどんどん発揮できるようになるだろう。その成果はまだまだ見えないかもしれないが、これを繰り返していくことで、釧路市内、釧路管内において様々な学校が取り組み始めたならば、きっと優れたサイエンティストが生まれてくるのではないかと思う。そうした夢を持ちたい。

高橋座長 先進的なことがここで行われているように感じる。小学校の基礎的な部分で、先生と一緒に考えてあげるという立場で子どもたちが育ってきたことが、中学生になった時にどのような意味を持ってくるのか、中学校の先生としてどのように対応すべきと考えられるか。

長谷委員 ご質問をうけて、学校運営の話になるのではと受け止めた。小中接続であったり、小学校でどのような学びをしてきたかということ、中学校の先生が知っているかといえば、ほぼ把握できていない。引継ぎをやっていないわけではないが、具体的に小学校で取り組んできたことが、相手に伝わる形で引き継がれるということが少ないという印象を持つ。先ほどの研究発表ボードのようなものが、目に見える形であると良いのではないかと感じた。

高橋座長 研究発表ボードを最初に見た時に、どのような感想を持ったか。

長谷委員 当時は、それほど肯定的ではなく、やるのが最初から規定されていることに少し違和感を持ったが、考えてみると、まずは学びの型を身につけ、それが出来てからであればいくらかでも探求に進んでいけると感じる。また、先生も一緒に調べているという学びのスタイルはまだまだ稀だと感じる。小学校での学びのスタイルを中学校で上手く生かして進めるという道筋は自分にはまだ見えない。総合的な学習の時間ではその余裕はなく、自分がおこなうとすれば持ち教科の理科の時間が考えられる。

高橋座長 標茶小学校の子どもたちの発表ボードの内容が変わってきたという意見をいただいたが、そのことに大変意味があるように感じる。生徒それぞれが自身で工夫し、考え、作り出し、型に当てはめられた中で行うということではなく、そこに様々な発想を組み込めるようになってきている。

様々な議論につながる意見が出されてきたが、ここまでの報告事項全体に関して、意見があればいただきたい。(意見なし) 次の議事について進みたい。

議事2 次年度の取り組みについて

事務局(瀧口保護官) 資料2に基づき説明。

高橋座長 今後の取り組みの方向性について、意見をいただきたい。前回のWGでお話した際に、気になっていた点はいくつかある。長谷委員から子どもたちの自己肯定感の話があったが、

湿原の近くに住んでいて、かけがえのないものを自分たちの村、町、市が持っているということに気づいてもらい誇り高い気持ちになる、嬉しい気持ちになるという自己承認という言い方をされていたと思うが。

柴田委員 同感の部分は多くある。違う地域に行った時に道東はどんな地域かを聞かれ何も答えられなかったり、海外の方のほうが詳しくなったりすることが結構ある。日頃は普通に生活する場ということになるが、ここに生えている何気ない花が世界や日本の中から見た時に、ここにしかないということを知り、すごいなと思ったり、隣で話をしていたおじさんが地域の役にとても立っていたりとか、歴史を持っている人だったんだと気づいた時に、子どもたちはこの地域は大切なんだと改めて感じたり、守りたいとか、ここに住んでいて良かったなと思う気持ちが出てくると思う。そういうところを、我々教員側としては育てていきたいと思うし、教員は異動があり地域を回っていくので、勉強を絶えずしていかないといけないと感じた。

高橋座長 前回のWGで池田委員から一つの例を教えていただいた。阿寒湖中学校から湖陵高校にやってきた学生が、マリモの学習を高校で行った際に目を輝かせて語っていたというお話があった。私が生きている場所なり、私が知っている事柄が話題になっている、研究の対象となっている事について、大変誇らし気な、目を輝かせた学習を行った、生き生きと発言をしていたというお話があった。釧路湿原に関する学習が単なる科学的な知識を積み上げることだけではなく、このようことが意識されていると、自分が今学ぼうとしている事柄に対する喜びと意味を学びながら感じられるのではないかと思う。

池田委員 湖陵高校の子ではなく、前任の釧路江南高等学校の生徒であるが、大変印象深く思っている。今年、息子が大学生になり東京に行き、英語のコミュニケーションの中で問われるのは、あなたの地元はどういうところなのかアピールしてみたくないと、題材となる。息子がとりあげたのは、釧路は涼しい、食べ物が美味しい、そして、釧路湿原であった。それほど釧路湿原に詳しい子ではないが、一生懸命調べて自慢げに話す。湖陵高校の子どもたちは、都会に出ていく子も多いので、地元のしっかりとしたアピールの一つとして釧路湿原は必須のものだと感じた。そのような思いを釧路の子どもたちが学習の中で財産としていったほうが良いのだろうと個人的に感じた。

高橋座長 それが釧路湿原検定の話とつながるのだろうか。釧路湿原の中を案内していただくのは新庄さんをお願いすることが圧倒的に多く、お引き受けいただいているが、いつでもどこでも大変楽しそうに案内いただき、それがとても良いなと常々感じる。楽しむということが学ぶ中に一つのきっかけになり、新しく新鮮な目で物事を見る。そうした素材が釧路地方にあるということが我々も意識しなくてはいけない。それに応じた努力を教員もしなければいけないと感じる。教員は何年かすると異動をしなくてはいけないが、逆に関心を持つ教員が広がっていくと考えれば異動があっても良いし、後任の新しい教員が新たに関心を持っていただければ良い。そういったことを、毎年の一つ一つの取組みの中に取り入れていければと考えている。そうした視点からもご意見をいただきたい。

池田委員 釧路検定までいかないとしても、釧路の先生方への湿原研修は必須だと感じる。小学校中学校の義務教育の先生だけではなく、高等学校の先生にとっても大切。全道での異動があるので、縁があつて釧路に来た先生には、積極的にそのようなことも学んでいただければ

ばと感じる。自身も学ばなければならないと考えている。

高橋座長 教員研修を実施している過程で参加する先生の感想をお聞きしていると思うが、そこに変化は見られるか。

事務局（山本） 今まで知らなかった、湿原にこのような魅力があったのかといった意見は毎年多くいただいている。フィールドに関心がある先生が参加されるが、釧路湿原については、ほとんど体験したことがない、経験としても知識としても、これまで触れることができなかったと、良いきっかけになったというご意見を多くいただく。

高橋座長 道東に赴任され、現場に足を踏み入れてみて感じることはあるか。

事務局（瀧口保護官） 赴任してきたのは、釧路湿原国立公園に係る業務ということで、入り口が湿原だったので身近に感じるが、それ以外の場では、近くに湿原があるということを感じることなく生活している人が結構多くいるであろうという実感を持っている。小学生の対応をしたり、個別で現場対応する際に話を聞くと、遠足や家族と展望台に行ったことはあるが、湿原との触れ合いというところまでは踏み込めていない人がほとんどだろうと感じた。

高橋座長 次年度の取組みの中で、良いアイデアがあれば意見をいただきたい。コロナ感染拡大の影響ということもあり、本日もオンラインの会議となっているが、マイナス要素だけではなく、新しいやり方にきっかけがつかめないか、今まで出来なかったやり方ができないだろうかと思う。オンラインでの講座の開催を検討していくということが資料中にも記載があるが、積極的に検討する余地がないであろうか。大学においても、皆で出かけるということが中止になったり、やってきたことができない状況が続いているが、オンラインのメリットも考えて講座の企画が出来ないであろうか。

事務局（山本） 本日は、教育委員会の皆さんがご欠席ということもあり、釧路教育局の佐々木委員からご意見をいただきたい。

佐々木委員 湿原を愛する心を育てるために先生方の研修の場を充実することと、実際に授業が行われている中で授業支援を行うという2つの側面からのアプローチをやられようとしていることは素晴らしいなと感じていた。実際に我々も先生方の研修を行う立場であるが、今年度はオンラインでの研修、You Tube での配信、ZOOM 等を使いながら研修を行うという機会も増えてきている。そのように考えると、先生方の研修の場の充実を図るためにオンラインの場を使うということは、先生方にとっても有難いことであろう。授業支援について、どうしても学校の先生方も子どもたちを沢山連れて外を歩くことが難しいという課題があり、総合的な学習の時間で子どもたちの意欲を喚起したり、動機を高めていくという時に、外部講師の支援というものが効果的な手立てになってくる部分もある。教室にしながら外部講師の話を聞いたり、自分たちの課題について知りたい事を外部講師に質問したりすることが可能ということであれば、非常に有効な手立てになってくると感じる。研修の場も大切であるが、授業の中でどのように専門家の方が関わっていただけるのかということが大事な要素になってくると、お話を聞きながら感じていた。

高橋座長 学習への新たなサポートが出てきた時に、協力してその体制を作っていただけならと思う。これまでも発表ボードを使った発表会を行う時に、内輪だけの発表会を越えて、外部から詳しい方、関心を持っている市民の方が聞きにきて時には批評するといったことがあることで、発表を行うことの緊張感と意味が生まれてくるように思う。そうした事に対して

サポートしてあげることが出来れば良いと感じるが。

佐々木委員 元々、小学校の教員をしていたが、実際に授業を作る時に大切にしないといけないこととして目的意識と相手意識をどう持たせるかということに対して課題と感じていた。総合的な学習の時間、その前段階の生活科の中で、ゴールをどう設定するかということ。お話にあったとおり、身内で発表しあって、作ったものを貼って終了としてしまいがちで、そのようにせざるを得ない時もあるが、そこに外部の人の目が入る、来てくれるということがわかるだけで、子どもたちが活動に取り組む意欲、意識が当然変わってくるということが多々あると思う。現状として、これについて外部の人に来てもらいたいとなった時に、どこにどのようにアプローチすれば実現するのであろうかという部分が、学校として模索することが難しいということが実情であろう。そうなった時に、このように外部の人が支援していくことが可能ですよと、教育委員会からも周知いただけると、学校としては、このようなものがあるということを知り、使っていただける学校が増えるのではないかと感じる。自分が学校現場にいれば、そういうものがあれば使いたいと思う。

高橋座長 発表会の際に境委員が講評された際、聞いていた子どもたちが大変誇りを感じられるお話をされたと事務局から聞いているが、どのようなお話をされたのかお聞かせいただきたい。

境委員 正直、お話した内容は覚えていない。発表会があった時に、外部の人が入り評価してあげることが大変重要。ボードを作成した際に、評価票を作成し事務局と一緒に評価するというところを行ったが、先生方も発表に対して評価してあげることが大切。評価の方法ということも、これから伝えていきたい。現在、湿原サイエンスフェアを行っているが、そうした場に学校の先生がボードを選び、出してあげるということも大切になってくる。一時、そうした評価をすることが公平性についてどうかといった話題もあったが、おこなったことに対して、ここが良い、ここが駄目、ここをもう少しなおした方が良い、この部分をもう少しやると良いといったことを指導してあげることが大切で、それを積み重ねていくことで変わっていくのではないと思う。別保小学校のカネフラー先生のところでもお話したが、おそらく、良いところと、ここはなおした方が良いということをお話したのでないだろうか。

カネフラー委員 実験は3回以上やらないと駄目と言ってくださり、子どもたちは感じた部分があるのだろう。理科でも個々の実験結果を全体の結果としてまとめるので、そうだよねという思いが出てきたり、ヤチボウズを生やした人はいないんだよと、君たちがヤチボウズを作れたら、それはヤチボウズのプロなんだよと言ってくれと、子どもたちは成れるかもしれないと、そんな気持ちを持って取り組んでいた。沢山の方に関わっていただき、子どもたちのモチベーションも高く、子どもたちの成長というか、楽しんで取り組んでいる姿を見て、こんなに力があるんだということを感じた。来週、参観日で発表を行うが、子どもたちはそれに向けて頑張っている。

高橋座長 学校の先生から見た時の取り組みへのご希望などあれば、ご意見をいただきたい。

カネフラー委員 中間発表会で多くの方に来ていただき、一人一人の発表をしっかりと見て頂いた。一人一人に批評をしていただき、自分一人では、短い時間に全ての発表ボードを細かく見るということは、とても難しいことなので大変助かった。中間発表会までは、私のところに子どもたちが並びどうしたら良いかと質問する子も多く、列で待つということが結構あっ

た。中間発表会が終わってからは、子どもたちは、私はこれをやるんだということをしっかりと決めて計画的に出来ていたの、私自身が何もしなくて良いのか心配になるくらいであった。すごいなと感じた。早い段階で一度来ていただいていたら、子どもたちもやりたいことが一杯見つかったのかなと感じていた。授業中に、これどうなんだろうねと、私自身もわからないことがあり、聞いてみたいねと、電話してみるかと話題になったこともあったが、誰も実際に行動するまでの気持ちになれなかったが、ZOOMが出来るようになっているので、相談できる人がいるということは大変心強いなと感じる。

高橋座長 ZOOMなどを使わざるを得なくなったことで、使えるようになったことで、可能性が一つ増えるかもしれない。そういった考え方が出来るだろう。学校教育の支援にプラスになるようなことが、これからの取組みの中で一つでも出来ればと考えている。様々な場所で、こういったことが出来れば良いという意見をいただければと思う。知識がある、専門性がある人達と生徒達をつなげるようなコーディネートを我々ワーキンググループが行うことが出来れば、意味があるだろうと感じている。

事務局（瀧口保護官） 事前に境委員より話題提供をいただけるとお伺いしている、湿原体験実習について概要を教えてください。

境委員 新庄先生にお願いして初めて学生を湿原に連れて行った。最近の学生はほとんど湿原に入っていない。今年はコロナの中ではあったが、屋外であるため大丈夫であろうと判断して連れて行った。最初は湿原に関してステレオタイプな話しか出てこなかったが、行く事によって湿原がどういう状況なのか肌身で感じて変わっていった。学生もそうであるが、先生方も同様ではないかと思う。釧路市内、釧路管内にいる先生方が、一度でも良いので湿原に入るような経験が出来れば、教材に使ってみようとする先生が増え、変わっていくのではないかと思う。学生から肌身を染みてわかった。

高橋座長 毎年行う予定か。

境委員 新庄先生にご相談していきたい。湿原に連れて行っても良いという人達、受けてくれる人達がわかれば、どんどん出来るのではないかと考えている。今年も出来れば行きたい。

高橋座長 大学が改組される前に新課程というものがあり、そこで無茶なことも行ったことがある。2月の初めの頃、湿原の中でテントで泊まったことがあった。新庄さんもお越しいただいて、こんな寒くて寝れないかもしれないと伝えると、どうせ寒いから寝れないでしょうと笑いながらお話をされていた。テントを立てるために雪を掘り出したら、血だらけのシカが出てきた。密漁をしたハンターがロースのみ切り取り、捨てていった場所だった。学生たちは最初怖がっていたが、あつと言う間に慣れてテントを立てて寝てみたり、夜中に寝れなくて起き出すと、夜が明けていく時の刻々と変わる空の色に見とれていたり、近くの川が音を立てて凍り出す音に耳を傾けてみたりと、しっかりと準備をすればマイナス 15℃でもテントで過ごせるということを知っただけで、彼らはいろいろな意味で様々なことを考えられたのだろう。湿原について知識が増えるだけでなく、生きる上での自分の自信のようなものを持って帰ることができた。境委員が教員養成課程の中でも行われていることに、大変嬉しく感じた。

時間となったため、今回の議論はここまでとしたい。事務局に進行をお返しする。

事務局（瀧口自然保護官） 様々な意見にお礼申し上げる。配布資料のチラシ等について説明させていただきます。（配布したチラシ、リーフレット等について説明）

次回のWGは次年度の夏休み期間での開催を予定している。近くなったら改めてご案内したい。小学校の先生については、年度単位での参加をお願いしており、これまでのご参加に感謝申し上げます。次年度についても参加いただける場合には、事務局にお声かけいただきたい。その他の委員の皆様については、引き続きのご参加をお願いしたい。異動等が生じた場合には、後任の方への引継ぎをお願いしたい。

これで第12回学校支援ワーキンググループを閉会する。